

挑戦的研究（萌芽） R1—R4年度

## 天文文化学の創設：天文と文化遺産を結ぶ文理融合研究の加速

Establishment of cultural astronomy: Acceleration and integration of arts and sciences on cultural heritage, astronomical phenomena, and mathematical understanding

### 活動報告

“cultural studies of astronomy”

真貝 寿明(大阪工業大学)

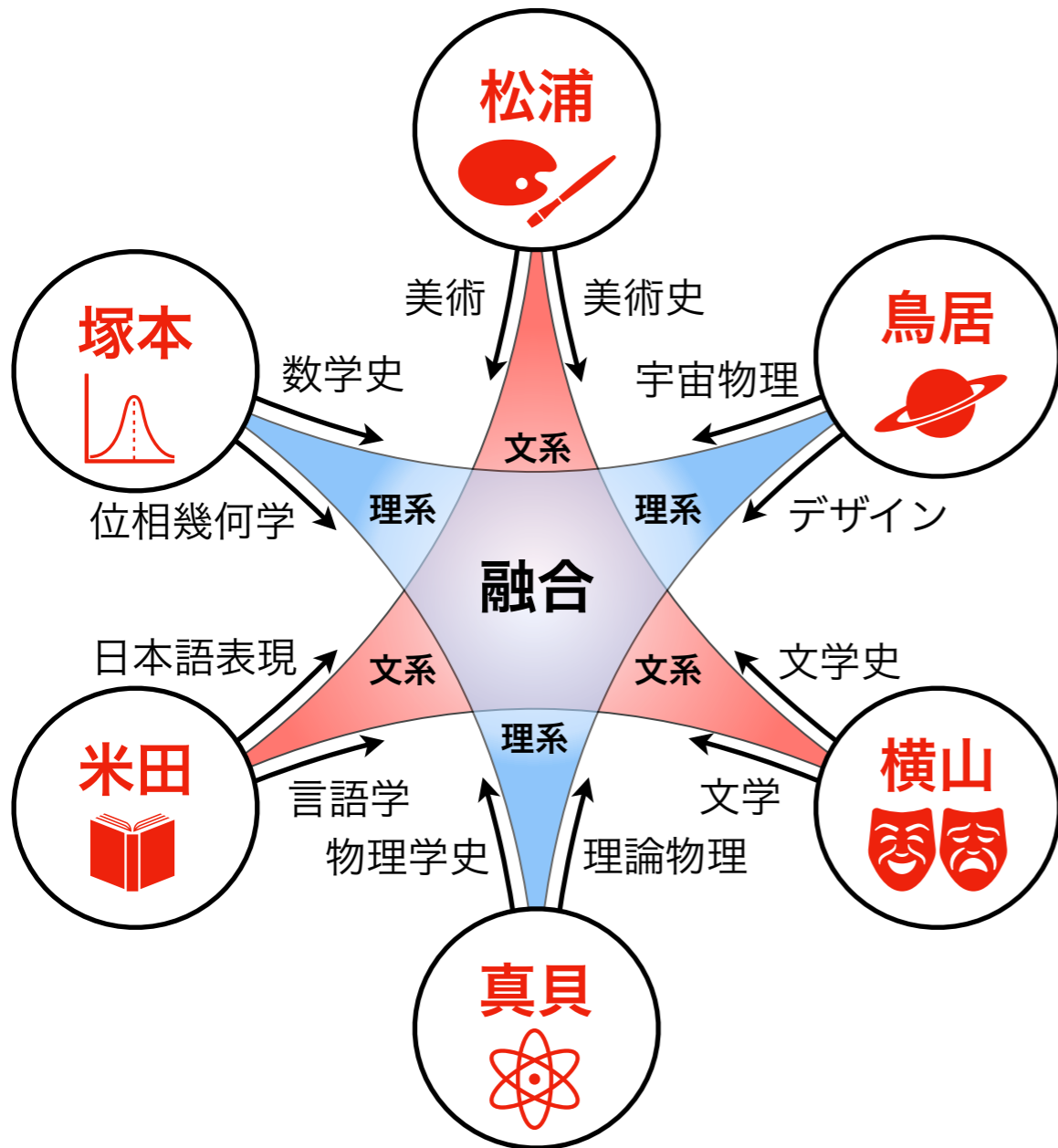
Hisaaki SHINKAI

<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/>



# 天文文化学の創設：天文と文化遺産を結ぶ文理融合研究の加速

Establishment of cultural astronomy: Acceleration and integration of arts and sciences on cultural heritage, astronomical phenomena, and mathematical understanding



代表	真貝寿明	大阪工大情報科学部
分担	松浦清	大阪工大工学部
	米田達郎	大阪工大工学部
	横山恵理	大阪工大情報科学部
	鳥居隆	大阪工大R&D学部
	塚本達也	大阪工大工学部

文系と理系の研究分野の垣根を越えて、「天文と文化」をキーワードにした横断的な学問分野を創始する

## 科研費研究課題『天文文化学の創設』の目指すもの

真貝 寿明（大阪工業大学）

Hisaaki SHINKAI



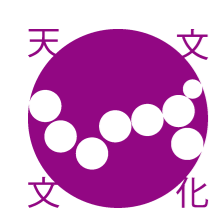
（研究申請書に記載した概要）

本研究の目的は、**文系と理系の研究分野の垣根を越えて、「天文と文化」をキーワードにした横断的な学問分野を創始すること**である。現代科学の発端は天文学であり、同時に天文現象は古代より人々の生活や文化活動に密接に関わってきた。文学や美術には天文に関わる記述が多々あり、天文学は学問の伝播経路にも足跡を残す。 **（中略）**

本研究においては、例えば曼荼羅や星図・文学作品に現れる天体現象の記述、あるいは近代天文学や物理学の受容プロセスの研究を行う。これらの対象に空間軸（地域軸）や時間軸（歴史軸）、あるいは文化的尺度を導入して、研究分野としての視点の拡大を進めたい。 **（中略）**

研究成果を博物館や科学館を通じて一般の方へのアウトリーチ活動へと結び、リベラルアーツの一翼として確立させることも試みる。

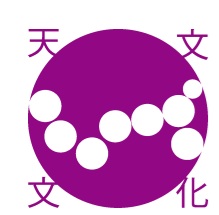
# 2019/4-2023/3 天文文化研究会



Covid 19 Era

2019	7月科研費採択 10月第18回研究会 対面	山下克明 星座木簡と古代の星図 勝俣 隆 星座神話としての日本神話研究の達成と課題 米田達郎 江戸の科学書を中心に見た十二宮の名称について—双児宮 を中心に— 西村昌能 記紀に見られる星の神様 経津主考 松浦 清 星曼荼羅研究の課題 真貝寿明 科研費研究課題『天文文化学の創設』の目指すもの
2020	9月第19回研究会 オンライン	
	12月第20回研究会 ハイブリッド	嘉数次人 18世紀末の寛政改暦事業初期における幕府と土御門家 作花一志 超新星出現の目撃者 —「平安陰陽師の見た客星」「戦国時代に現れた客星」 「最古の超新星出現記録」 真貝寿明 志筑忠雄が取り組んだケイルの物理学書の位置づけ
2021	7月第21回研究会	
	12月第22回研究会	玉澤春史 天変地異の記録を用いた歴史科学技術社会論試論 Sang-Hyeon Ahn The instruments developed during the reign period of King Sejong the great and its applications
2022	6月第23回研究会	岩橋清美 オーロラと近世社会 -- オーロラをめぐる人々の意識と記録のあり方 - 北井礼三郎 明治4年12月のオーロライベントの飛騨高山での記録 陶山 徹 長野県天文文化研究会の活 -- 長野県は宇宙県 -- 吉田 薫 堺・正覚寺 須弥象碑、須弥山儀について
2023	1月第24回研究会	

# 2019/4-2023/3 天文文化研究会



Covid 19 Era

2019
2020
2021
2022
2023

7月科研費採択  
10月第18回研究会

対面

9月第19回研究会

オンライン

12月第20回研究会

ハイブリッド

7月第21回研究会

ハイブリッド

12月第22回研究会

ハイブリッド

6月第23回研究会

1月第24回研究会

株本訓久 岩橋善兵衛を祖とする岩橋家製の望遠鏡  
 白雲飛 長谷寺の馬鳴菩薩立体曼陀羅図について  
 松浦清 久保田桃水<雪之図>の写生的風景  
 月を描く絵画の構図に見る時間解釈を中心に  
 大西浩次 「市民科学としての「長野県は宇宙県」の近代天文学史100年  
 西村昌能 フツヌシと古代銅鏡  
 米田達郎 江戸庶民は『火星』をどのように認識していたか 大阪大学『語文』  
 井村誠 南方熊楠の英文論考「東洋の星座」--The Constellations of the Far East--  
 鳥居隆 魅惑のアストロラーベ  
 横山恵理 『大乘院寺社雑事記』における祈雨  
 作花一志 改定太陽暦  
 真貝寿明 明治はじめの窮理熱と『滑稽窮理 臍の西國』

勝俣隆 三途の川は天の河  
 西尾元伸 泉鏡花『湯島詣』再読 - 「流れ星」を起点として  
 竹迫忍 北極星による古代の正方位測量法 - 宮殿の正方位化にみる飛鳥時代の変革 -  
 玉澤春史 地球惑星科学の訳語と知識流入・伝播過程：「北光」周辺の経過報告  
 横山恵理 『新板絵入 伊勢物語』貼付「たなばた歌づくし」の紹介  
 井村誠 南方熊楠の英文論考「宵の明星と暁の明星」--Hesper and Phosphor--

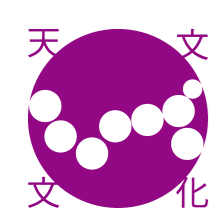
(brief introduction)

第1回「天文と文化」展示

『天文文化学へのいざない 過去・現在・未来をつなぐ星たち』展



# 2019/4-2023/3 天文文化研究会



Covid 19 Era

2019	7月科研費採択 10月第18回研究会 対面
2020	9月第19回研究会 オンライン 12月第20回研究会 ハイブリッド
2021	7月第21回研究会 ハイブリッド 12月第22回研究会 ハイブリッド
2022	6月第23回研究会 ハイブリッド
2023	1月第24回研究会 ハイブリッド

嘉数次人 江戸幕府の紅葉山文庫と幕府天文方  
 米田達郎 自転の語史  
 玉澤 春史 NDL Ngram Viewerを用いた天文文化研究の可能性  
 岩橋清美&北井礼三郎 ドナティ彗星観測記録を用いた観測技術の比較研究  
 真貝寿明 open discussion  
 竹迫 忍 方位による下ツ道の建設年代の推定  
 松浦 清 日食を描く原在明筆〈天保九如図〉について  
 井村 誠 南方マンダラと事の学について 大学紀要掲載  
 横山恵理 『花鳥余情』における「彦星の光」注をめぐる 大学紀要掲載  
 作花一志 平安末期の天変地異  
 大西浩次 「諏訪天文同好会設立100周年記念シンポジウム」案のご紹介

真貝寿明 天文文化 活動報告  
 竹迫 忍 中国古代星図の年代推定法  
 作花一志 古代中国王朝についての天文学的考察  
 Sang-Hyeon Ahn Dating Kusyar ibn Labban's Introduction to Astrology  
 井村 誠 熊楠のミクロコスモスとマクロコスモス  
 勝俣 隆 古事記・日本書紀に見られる「弟棚機（おとたなばた）」の歌は、七夕伝説と関係あるか？  
 白 雲飛 「三十六禽（図）」の諸相 -- 煩悩の数と形象、そして蛞蝓(なめくじ)について --  
 加藤賢一 プラネタリウム100年史  
 北井礼三郎 告知2件 ICOMOS-IAU Thematic Study / Yael Nazeさん講演会  
 松浦 清 月を描く絵画が示す時間 - 秋草と月の作例  
 横山恵理 『花鳥余情』における「月日の光」注をめぐる  
 真貝寿明 古世界地図に添えられた天文図の由来

2019
2020
2021
2022
2023

webpage開設

12月第1回展示会

<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/tenmonbunka/index.html>



# 展示会の開催

## I. 美術品にみる天文学

平安時代の中頃、密教は「星曼荼羅」という作品を創作しました。江戸時代に描かれた星曼荼羅の構図や天体の表現も、平安時代以来の基本的な表現を踏襲し、星への信仰を伝えています。江戸時代に制作された世俗絵画のジャンルにも天体を描く作品があります。併せて紹介します。

### ●星曼荼羅

仏教の一形態である密教は、天空の星々への信仰を儀礼化するうえで「星曼荼羅」という礼拝対象を創作しました。北斗法という密教儀礼の本尊とするためです。その表現形式は円形式と方形式の二種類に大別されます。

方形式の構成要素と配置をみると、どの作例もほぼ同じ構成原理で描かれています。一字金輪仏頂尊という中心尊格の周囲に、北斗七星と九曜を配置し、その周りに黄道十二宮、さらにその周りに二十八宿という星座を配置する構成原理です。中尊を除き、描かれているのはいずれも天空の天体です。北斗法という儀礼とこの構成原理がどのような関係にあるのか、天空の星々への信仰を紹介します。

また、「妙見菩薩像ならびに九曜図」、仏教宇宙モデルとしての「須弥山図」などの宗教絵画と、江戸時代に制作された世俗絵画を対比させて、天体を描く絵画の多様性も併せて紹介します。



星曼荼羅 江戸時代

- 妙見菩薩像ならびに九曜図
- 須弥山図 円通
- 天保九如図 原在明画
- 二見ヶ浦図 窪俊清画並びに賛

## II. 文学作品にみる天文学

鎌倉時代に「冬の星の美しさ」を詠んだ建礼門院右京大夫の和歌が和歌集に入集されたことにより、星の文学史が大きく変わりました。室町時代には「法輪寺縁起」の明星信仰をふまえた『恋路ゆかしき大将』が作られました。ここでは和歌・散文・漢文それぞれの「星の文学史」をたどり、その過渡期の状況を提示します。

### ●たなばた歌づくし

写真は、「新板絵入伊勢物語」の後見返し部分に見える「たなばた歌づくし」です。同作品の刊本後見返しに「たなばた歌づくし」を有するものは、普及の限り例がなく、本書の享受一面を窺い知ることができる貴重な例です。



『新板絵入伊勢物語』(1715年刊)

### ●星の美を紡ぐ

文学作品にみる「星」の用例は、まず和歌にみられます。中国文学の影響を受けた「七夕」等が詠み込まれることが多い一方、中文学(散文)で「星の美」そのものが取り上げられる例は稀といえます。文学史における「星の美」は、鎌倉時代、建礼門院右京大夫による和歌で転換期を迎えます。室町時代には「法輪寺縁起」にみえる明星信仰をふまえた本文をもつ物語も作成されるようになりました。ここでは散文には珍しい「冬の星の美しさ」が描かれています。今回は、江戸時代の用例として、京都・養仙院門跡蔵『養仙集』から、尼僧がよんだ「星」の漢詩も紹介します。千年以上にわたり、人々がどのように星の美を訪れたのか、文学史を紐解きます。

- 和歌における「星」(上代～中世)
- 散文における「星」(中文学)
- 中世王朝物語における「星の光」
- 尼僧がよんだ「星」の漢詩(近世)
- 『新板絵入伊勢物語』(1715年刊)後見返し「たなばた歌づくし」

## III. 言語学からみる天文学

江戸時代の日本において、天文関係の語彙は方言も含めて多様多様な広がりを持っていました。しかし、明治時代になると、教育制度を整える政府の方針の下に次第に統一され、現在の私たちが使用しているものへと定着していきます。今回は、その過渡期の状況を提示します。

### ●江戸・明治期の天文用語

歴史的に天文事象と生活は深く関わり合っています。日本では特定の星の呼び名も様々なものが見られます。例えば太陽については、日輪・お天道様・お日様、日などです。種々さまざまな言い方がなされるのは江戸時代後期に顕著で、この背景には中国語・仏教語・西洋語の翻訳などが影響しています。明治時代になると教育制度が整備されるに当たり、徐々に天文用語も統一されていきました。



『改正増補物理附録』(1879年)：小学生高学年用に使われた理科の教科書。内容には現在の高校生が学ぶことも含まれるという、当時の教育水準を知ることができる。

Chinese names.	Remarks.	Objects of Indian Sans.
1. Wu (Worm)	The ball with horns.	The head of a bull.
2. Wu (Tail)	Curved, with a tail like the tail of a dragon.	The tail of a dragon.
3. Wu (Witch)	The tail of a witch.	The witch.
4. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.
5. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.
6. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.
7. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.
8. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.
9. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.
10. Wu (The Horn)	The tail of a horn.	The horn of a bull.

科学雑誌「ネイチャー」(1893年)に掲載された南方熊楠の論文

- 『改正増補物理附録』の語彙
- 十二宮の名称について
- 「遊星」と「惑星」について
- 天文学に関する語彙の問題
- 南方熊楠のネイチャー論考に見られる星座の語彙

## IV. 学問の受容プロセスと天文学

鎖国をしていた江戸時代、西洋科学は中国経由か蘭書経由でしか日本に伝わりませんでした。ニュートン力学は提唱されてから100年以上遅れて日本に伝わりました。西洋科学の理解に携わった江戸時代の学者たち、明治以降の窮理熱ブームから、日本人の科学に対する認識を理解することができます。

### ●日本人の近世天文学との出会い

江戸時代、中国書から伝えられた太陽系モデルは、ティコ・ブラーエの地球中心モデルでした。暦をつくる目的にはこれで十分でした。志筑忠雄で書かれたニュートンの物理学書と20年以上も対峙して、解説付きの翻訳を行いました。明治初期、西洋科学を紹介する窮理熱ブームがおきました。



(上) 志筑忠雄『歷象新書上編』(1798年)にて、惑星の面積速度一定の法則が説明されている部分。(中) 増山守正『滑稽窮理書』(1877年)表紙。(下) 中国書『歴象考成』五星本天宮以地為心にある古図と新図

世界各地から集められた星座早見盤

科学雑誌「ネイチャー」(1893年)に掲載された南方熊楠の論文

- 中国・日本・ヨーロッパの天文・物理の受容に関する年表
- 麻田剛立は、ケプラーの第三法則を独自に発見したのか
- 志筑忠雄の到達したニュートン物理学の理解
- 窮理学を題材にした落語形式の教科書『蹟の西国』

## V. 工芸品にみる天文学

天体観測や占術のために世界中で様々な観測機器が発明されてきました。初めは「機器」として利用されていたものも、人々の生活に取り込まれるようになると、必然としてそれらの持つ装飾的要素が花開きます。そして、優雅に、洗練され、ひとつの工芸品として昇華していったのです。

### ●アストロラーベの装飾と可能性

望遠鏡よりも前に使われていた天体観測用の機器のひとつにアストロラーベがあります。紀元前ヨーロッパで発明されたアストロラーベは、イスラム圏に伝わると様々な改良が施され、数百年にも及ぶ使用がある中世のコンピュータとなりました。また、細部にわたって独自の自由な装飾が施され、工芸品としての地位を確立するようになりました。下の写真はアクリルとレーザー加工機を用いて作成された「現代版アストロラーベ」です。現代の材料と最新の機械を用いると中世の天文機器はどのような表現を持ち得るのか、これからの可能性に興味を尽かします。



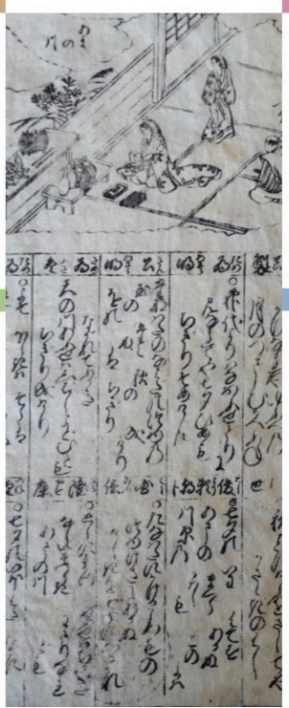
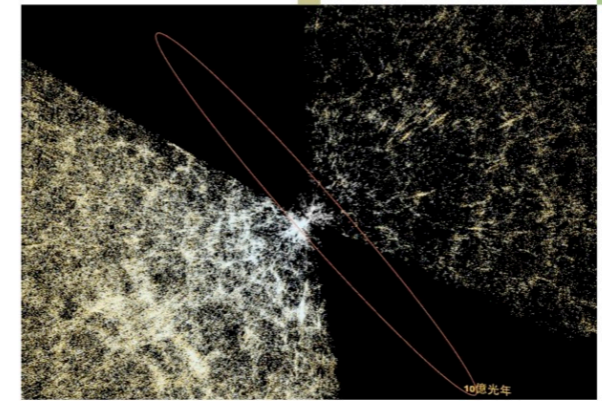
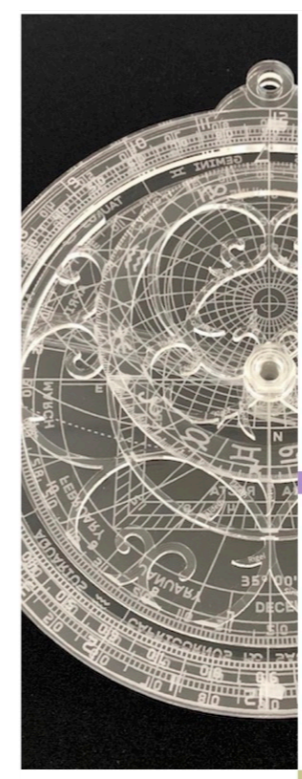
アクリル製の現代版アストロラーベ

- 世界の星座盤
- アストロラーベがルーツとも言われる星座早見盤。日にちと時刻を合わせて、見たい方向にかざすと天体や星座の位置を示してくれる。世界中で利用され、最近ではアプリ版も登場しています。

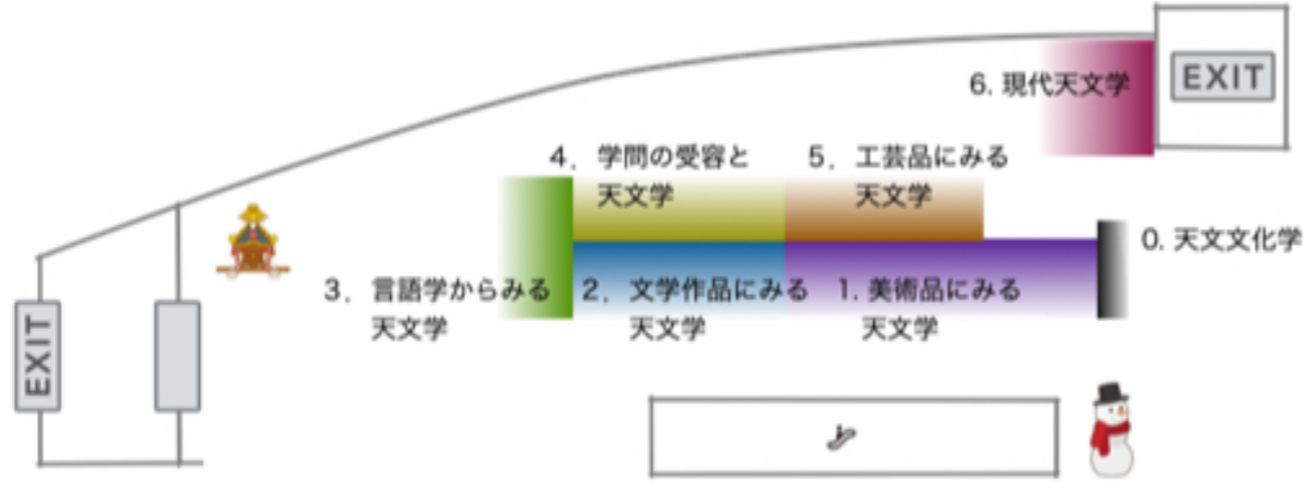


世界各地から集められた星座早見盤

- 星図
- 六分儀・日時計など



## 12月第1回展示会



第1回「天文と文化」企画展  
 天文文化学へのいざない  
 ～ 過去、現在、未来をつなぐ星たち ～

Cultural Studies of Astronomy — Stars linking our past, present, and future —

2021年12月2日(Thur.)～12月5日(Sun.)

大阪工業大学 OIT梅田タワー 1階フロア | 開室時間/10:00～17:00 会期中無休  
〒535-8585 大阪市北区茶屋町 1-45 | url: <http://www.oit.ac.jp>

※本展示は、科研費・挑戦的研究(萌芽)「天文文化学の創設：天文と文化遺産を結ぶ文理融合研究の加速」(2019-21年度、課題番号19K21621)の活動の1つとして開催するものです。(<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/tenmonbunka/>)



大阪工業大学  
OSAKA INSTITUTE OF TECHNOLOGY



2019
2020
2021
2022
2023

9月「天文月報」紹介文掲載

12月「天文文化学序説」出版

1月大学紀要ジャック

## 9月「天文月報」紹介文掲載

特集 天文と社会をつなぐ最近の動向

### 「天文文化学」創設の試み

真 貝 寿 明<sup>1</sup>・松 浦 清<sup>2</sup>・  
米 田 達 郎<sup>3</sup>・横 山 恵 理<sup>4</sup>

〈<sup>1,4</sup>大阪工業大学情報科学部 〒573-0196 大阪府枚方市北山 1-79-1〉  
〈<sup>2,3</sup>大阪工業大学工学部 〒535-8585 大阪府大阪市旭区大宮 5-16-1〉  
e-mail: <sup>1</sup> hisaaki.shinkai@oit.ac.jp, <sup>2</sup> kiyoshi.matsuura@oit.ac.jp, <sup>3</sup> tatsuro.yoneda@oit.ac.jp, <sup>4</sup> eri.yokoyama@oit.ac.jp



左上から時計回りに米田・真貝・松浦・横山

天文現象は人々の生活に実用的な学問を成立させた。天文学はもっとも歴史がある身近な科学であり、近代科学が太陽系モデルの樹立から始まったことは周知のことである。それとともに、天文現象は文学や美術などにも影響を与え、人々の生活に潤いを与えてきた。私たちは、広い意味での文化史と科学史の融合を目指す複合領域として「天文文化学」を創設しようと活動している。まだ提案段階にすぎないが、その目指す方向を読者の皆様と共有したい。本稿では、我々が取り組み始めた科学史・言語史・文学・美術のトピックからのアプローチを紹介する。

#### 1. 天文学は科学や文化の出発点

夜空に輝く天体は、文明の誕生以来、人々を魅了し、知的好奇心を喚起させてきた。暦を作るために太陽や月の運動が利用され、奇妙な動きを見せる惑星の運動は星占いに利用された。星空が我々に与える印象は、世界各地で宇宙観を形成させ、さまざまな宗教を創出した。そして、天体の運動を解明する努力が、近代物理学を完成させ、自然現象に対する科学的なアプローチを確立させた。

この一連の動きは、現代に於いても継続されている。現代の天文観測は、可視光による観測の他に、赤外線・電波・X線・ガンマ線など異なる波長帯での電磁波観測に拡張され、宇宙に存在するさまざまな天体現象を明らかにし、より遠く・より過去の宇宙の姿を明らかにしようと発展している。2016年には、重力波観測が実現したことも報告され、新たな「目」を手にした我々は、光を放たないブラックホールや宇宙の最初期の情報を得る手段を手中に入れつつある。宇宙の成り立ち

を解明しようと努力することは、なぜ人類が存在するのかを根源的に明らかにする努力でもあり、人類の知識のゴールでもある。

この一方で、天文現象は、実用的な学問の他にも、生活に潤いを与える多くの芸術（文学作品・美術作品・建造物など）を生み出してきた。「天文」を軸に据えた時間と空間への意識、それらに基づく絵画や造形物など人間が生活の中で作り出したあらゆる文化遺産が残されている。これらの創作活動は単発的なものであったかもしれないが、人間の文化的活動の証として歴史を形成するものでもある。そこで、新たな研究の論点に、空間軸（地域軸）や時間軸（歴史軸）、あるいは文化的尺度を導入して、人々の探求心や文化伝承を思想的ないし科学的な視点から取り上げるのはどうか、との着想に至る。

天文学に対しては、これまでに科学史・技術史的な俯瞰、そして地域史的な俯瞰などは試みられてきた（例えば [1, 2]）。しかし、これらに文化的要素を含めて論じるのは新しいことかもしれない。こうして、「天文文化学」と銘打った研究活

SHIBUNKAKU

## 思文閣

---

美術
展示
古典籍
●出版
店舗
美術人名辞典
En

---

出版トップ
書籍一覧
広報誌
注文一覧表・目録

---

ジャンルで検索

書名・著者・内容紹介・目次などから検索できます

検索する

---

[トップページ](#) > [出版](#) > [書籍一覧](#) > [天文文化学序説](#)



テンモンブンカガクジョセツ

### 天文文化学序説

分野横断的にみる歴史と科学

松浦清 編  
真貝寿明 編

---

体裁	A5判・394頁
刊行年月	2021年12月
ISBN	978-4-7842-2020-5

定価 **10,450** 円 (税込)

本体 9,500円

2021年12月「天文文化学序説」出版

## 目次

『天文文化学序説』の刊行に際して(松浦 清)

### Part1: 絵画作品にみる天文

- 愛染明王と星宿—香雪美術館蔵「愛染曼荼羅図」について—(郷司泰仁)
- 庚申信仰と中世の青面金剛画像(石田 淳)
- 久保田桃水〈雪之図〉の写生的風景—月を描く絵画の構図に見る時間解釈を中心に—(松浦 清)
- 研究ノート 東東洋筆「河図図」についての考察—養賢堂学頭・大槻平泉の講堂建築構想と絵師・東東洋の画業における位置付け—(寺澤慎吾)

### Part2: 文学・信仰としての天文

- 日本神話の星—聖なる中心を表わす北極星、天空神伊邪那岐命の太刀が星座となった天之尾羽張神—(勝俣 隆)
- 記紀神話に見られる星の神—経津主神考—(西村昌能)
- 日本古代の星辰信仰—文献・出土資料からの検討—(山下克明)
- 『恋路ゆかしき大将』巻一制作背景をめぐって—法輪寺と「星の光」詠を手がかりに—(横山恵理)
- 江戸・明治の科学書を中心に見た双子宮の名称と定着(米田達郎)
- 研究ノート 巨石と天文現象—アステリズムを探して—(神羽麻紀)

### Part3: 近現代科学でとらえる天文

- 近代物理学との邂逅—麻田剛立、本木良永と志筑忠雄—(真貝寿明)
- 宇宙物理学で見る宇宙と人類の地平(鳥居 隆)
- コラム 超新星出現の目撃者(作花一志)
- 人々は空を見て何を思うか—天文と歴史を科学コミュニケーションでつないで考える—(玉澤春史)

天文文化学の目指すもの—理系出身者の視点から— (真貝寿明)

<https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/list/9784784220205/>

期日	種別	発表者	タイトルなど
2019年9月	論文	米田	「日輪」から「太陽」へ 江戸の科学書を中心に, <a href="#">近代語研究 第21集</a> (近代語学会編, 武蔵野書院, ISBN 978-4-8386-0723-5)
2021年8月	解説	真貝, 松浦, 米田, 横山	「天文文化学」創設の試み <a href="#">「天文月報」2021年9月号第114巻第9号 p573-582 pdf</a>
2021年9月	翻刻	真貝	[翻刻] 滑稽窮理 臍の西国 <a href="#">大阪工業大学紀要 66(2021) p49-68</a>
2021年10月	論文	横山	法華寺蔵『七草絵巻』における〈和〉と〈漢〉, <a href="#">古代文学研究会『古代文学研究 第二次』第30巻</a>
2021年12月	出版	松浦, 真貝, 米田, 横山, 鳥居	松浦清・真貝寿明 編『天文文化学序説 --分野横断的にみる歴史と科学』 (思文閣出版, 2021年12月20日刊行, 定価 10,450円 (税込), ISBN 978-4-7842-2020-5) <a href="#">思文閣出版のページ</a>
2022年3月	論文	米田	『火星』の語史—江戸・明治を中心に—, <a href="#">大阪大学『語文』</a> 第116・117輯 122-136頁
2022年4月	解説	真貝	滑稽窮理 臍の西国 -- 明治初頭の啓蒙書ブームと増山守正, <a href="#">窮理21号</a> (窮理舎)
2022年10月	論文	米田	「『遊星』から『惑星』へ—明治時代以降を中心に—」 『近代語研究』第23集 295~315頁 武蔵野書院
2022年10月	論文	井村	「南方熊楠のネイチャー誌掲載英文論考一覧」 日本英学史学会『英学史研究』第55号
2023年1月	論文	真貝	幕末から明治初期にかけての西洋物理学の受容: 書誌対応を軸とする俯瞰, <a href="#">大阪工業大学紀要 67 (2022) p47-59</a>
2023年1月	論文	井村	南方熊楠のネイチャー誌掲載英文論考 一天文学関係論考 2 篇一, <a href="#">大阪工業大学紀要 67 (2022) p85-92</a>
2023年1月	論文	横山	『花鳥余情』における「彦星の光」注をめぐって, <a href="#">大阪工業大学紀要 67 (2022) p93-102</a>
2023年1月	論文	米田	【紹介】 『西洋見聞図解 前輯 全』 (1), <a href="#">大阪工業大学紀要 67 (2022) p114-140</a>



- |                     |                             |
|---------------------|-----------------------------|
| 1. 全体企画             | 研究会開催7, 展示会開催1              |
| 2a. 出版, 関連論文        | 13件                         |
| 3a. 研究発表            | 天文文化研究会以外で2件<br>天文文化研究会で20件 |
| 4a. 一般向け 講演, 対外活動など | 18件(6回シリーズでも1件と数える)         |
| 5. その他の活動           | 多数                          |

<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/tenmonbunka/products.html>



## 天文文化学の創設：

天文と文化遺産を結ぶ文理融合研究の加速

Establishment of cultural astronomy: Acceleration and integration of arts and sciences on cultural heritage, astronomical phenomena, and mathematical understanding

<http://www.oit.ac.jp/is/shinkai/tenmonbunka/products.html>

Home | 天文文化研究会 | 企画展(2021) | 科研費プロジェクト | メンバー | **成果**

Home > Products page

### 科研費 挑戦的研究(萌芽) 採択 (2019--2021年度, 課題番号19K21621)

計画の概要, 研究実績の概要などは, [科研費プロジェクトのページ](#)をご参照ください.

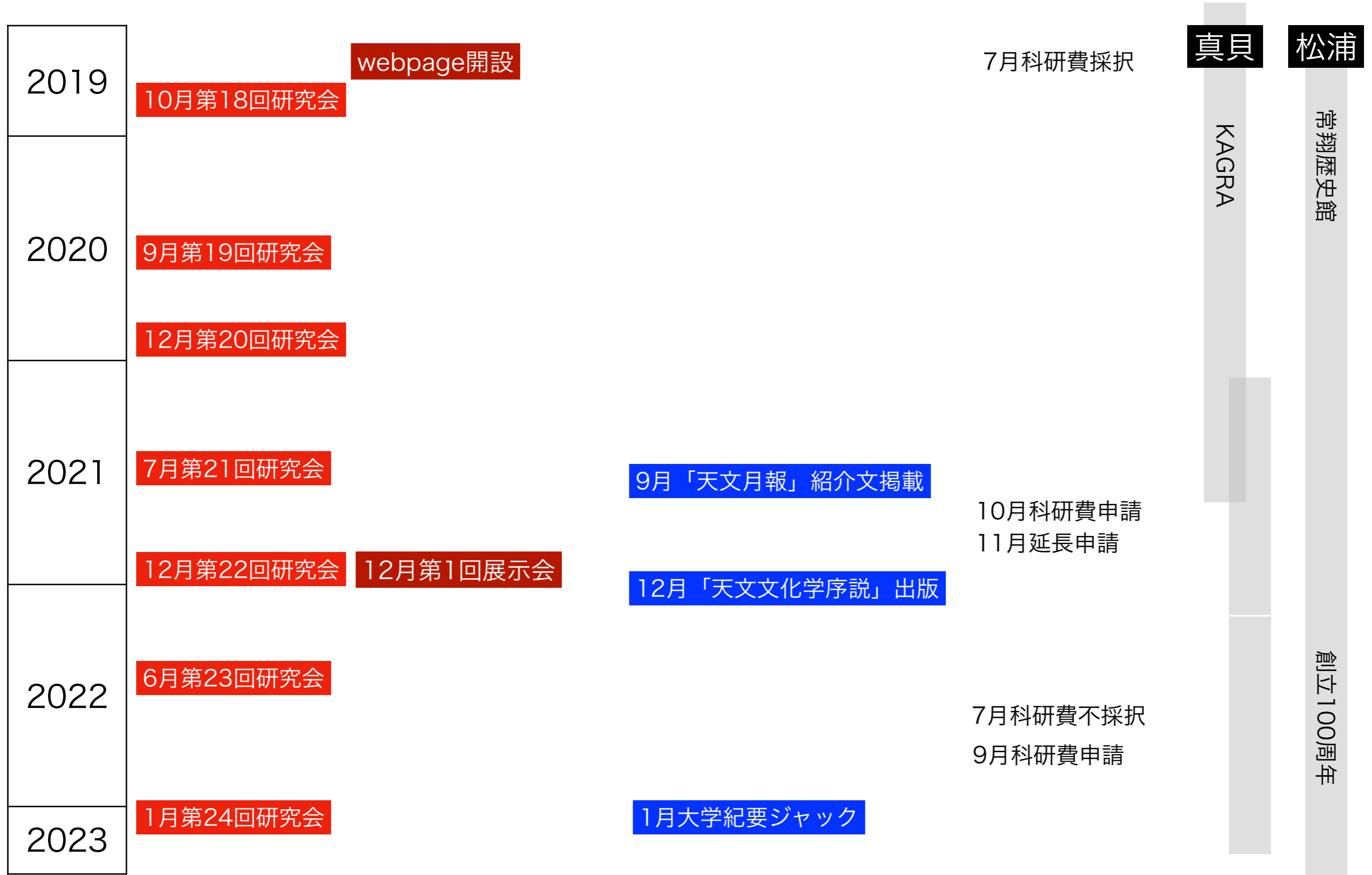
### 構成メンバー

#### Site Menu

- ▶ HOME
- ▶ 天文文化研究会
- ▶ 企画展(2021)
- ▶ 科研費プロジェクト
- ▶ メンバー

# 挑戦的研究(萌芽) R1—R4年度

Covid 19 Era



研究課題名 **天文文化学の展開:天文を入口として俯瞰する世界 ～文化史・科学論・自然観の統合**

研究代表 松浦清 + 研究分担 8名

## 要約

天文現象は古代より人々の生活や文化活動に密接に関わり、文学や美術には天文に関わる表現を数多く認める。また、現代科学の発端は天文学といわれ、天文学は学問の伝播経路に明確な足跡を残す。そこで我々は、古典籍・美術品・工芸品・遺跡・数式等も視野に入れて、天文に関わる表現を取り上げ、文化史・科学論・自然観を考察する「天文文化学」(Cultural Studies of Astronomy)と呼ぶ新たな研究領域を展開する。広い意味での文化史と科学史の融合領域の開拓である。文系理系の研究者の得意分野を融合し、空間軸(地域軸)や時間軸(歴史軸)、あるいは文化的尺度を導入して、従来の歴史的解釈に新たな視点を導入する。研究手段にはフィールド調査・文献調査・データベース構築・模型制作等も含め、5年の期間で、この分野の研究土壌を整える。年2回開催している専門家向け研究会の規模を拡大するとともに、研究成果を博物館や科学館を通じて一般の方へのアウトリーチ活動へと結び、リベラルアーツの一翼としてこの領域を確立させる。本申請は、現在最終年度を迎えている挑戦的研究(萌芽)「天文文化学の創設」(研究代表者:真貝寿明)を継続・発展させるものである。

